「今日の説教、聴き手のために」　2012/9/16　明治学院教会（287）
（このプリントは毎週作っているものです）　牧師　岩井健作
「善を求めよ」　アモス書　５章４節－２０節
選句「わたしを求めよ、そして生きよ」(4)

1、アモス書のこの箇所を読んでいて、私は子供の頃を思い出しました。今から68年位前の日本の国の状況です。太平洋戦争の時代、天皇絶対の軍国主義でした。小学校では毎月始め、全校生が教師に引率され氏神様に、戦勝祈願のお参りをしました。日本が戦争に勝ちますように、そのために神風が吹きますように、そして戦地の兵隊さんを守ってください、ということだったと思います。「神風」というのは、「蒙古来襲、元冠」の古事に因んだ言葉です。1274年と1281年には10万の兵で元軍は壱岐・対島を侵し博多に迫り攻めましたが、二度とも大風、すなわち神風が起こって、全軍沈没をしたという古事です。これは後に、宗教は国難を救うことに使われ、日本の国家神道（国家と宗教の分離を超える）は、「神風」を求める戦争遂行の精神的柱となり、靖国神社、伊勢神宮はその中心となり、神社神道（本来は宗教）はその構造に統括されました。キリスト教でも宗教団体法で統合（日本基督教団の成立）が行なわれ、必勝祈願・祈祷会が行なわれました。戦争遂行の宗教政策の一貫でした。
2、「ベテルに助けを求めるな、ギルガルに行くな、ベエル・シバに赴くな」(5)は、当時の国家宗教の祭壇で「神風」を祈るほどの場所でした。「神風」はアモスでは「主の日」[5:18]でした。「主の日」信仰から自由になって、「わたし（ヤハウェ・主）を、求めよ、そして生きよ」は国家宗教の拒否という、凄い個人の決断を含んでいます。アモスは当時の宗教国家の側からは反逆者の烙印を押されました（7:10-13先週説教箇所）。民衆に習慣化させられた巡礼や供儀や農耕の豊作祈願が結局は、人間的利害に「神」を従属せしめるものであるならば、「“救い”の人間的取り込み」であって、ヤハウェ宗教本来の神関係（命、魂、人格を生かす関係）ではないことを、「わたしを求めよ」の一句が鮮明にしています。民衆が「生き伸びる」ための保証とした祭壇の神観念の大転換をアモスは求めたのです。（新約でいえば、「神を愛することから、神がわたしたちを愛したこと」への主語の大転換です。[ヨハⅠ4:10]）。
3、さて、「善を求めよ」(14)は、「わたし（神）を求めよ」との内的つながりで語られます。現代的にいえば「宗教と倫理」の問題です。頭や、口先だけの信仰者ではダメなのです。旧約学者関根清三氏の言葉によれば「最終的判断は神の『憐れみ』(5:15)に委ねられつつも、それに関わるものとして、神に対する能動的な働きかけが語られている。つまり、人間の主体的な歴史形成の責任と、それでも歴史を超えるものへの信仰とのバランスが説かれている。」とあります。またA，ヴァイザーは「神への献身は、善に対する服従への真の源泉だからである。」と別な面から言っています。
4、いまわたしたちの社会は「経済性か命か」という問いに直面しています。福島の母親たちに始まる決断は「個人の内面の事柄であり、その集積として多くの人が原発には頼らないと決めたのである」（東京新聞名古屋本社、深田稔論説主幹2012/9/15）と指摘しています。信仰は個人のことであり、「善を求める」決断は個人の決断です。しかし、同時に経済と効率の社会を拒否する原動力であることは希望です。